

候補豚の導入と 馴致のポイント

～メリットとリスクを正確に認識し、検査を併用した効果的な対応を～

(有)サミットベテリナリーサービス 石川弘道

「馴致」とは？

繁殖豚に限らず、豚を農場に導入すると、一時的に食欲が落ちたり、咳をしたり、下痢をするなどして体調を崩すことがある。これは、今まで自分が育ってきた環境（養豚場）とは異なった微生物群に豚が感染することが1つの要因である。こうした状態で体調が回復する前に交配したり、妊娠中や分娩後に新しい農場の微生物に感染すると、繁殖障害や哺乳子豚の下痢が発生するなどの被害を受けることになる。このような状態を繰り返しては、決して農場の生産性は上がらない。

馴致とは、新規に導入された豚を、その養豚場の微生物群に“馴らす”ことを言う。馴致に関しては、いまだ賛否両論がある。反対者の意見の大半は、「野外の病原体をばらまくことになるので危険」というものである。しかし隔離・馴致豚舎を設置し、十分な回復期間を設ければ、得られる効果は大きいと考える。また、馴致だけで農場成績が向上するわけではない。農場成績を向上させるためには、分割授乳の実施、オールイン・オールアウトによる飼養管理、ヒネ豚の早期淘汰などを総合的に実施して初めて効果が現れる。

馴致は隔離豚舎で実施する

馴致を実施する場合、次のような守るべきルールがある

- ① 馴致は隔離豚舎で実施すること
- ② 十分な回復期間を設けること。少なくとも60日、できれば90日
- ③ 豚赤痢、抗酸菌症、豚丹毒などの疾病が活発に発生している場合は馴致を控える
- ④ 専門獣医師の指導の下で実施する

近年、養豚場のヘルスコントロールのために、繁殖候補豚

の馴致の重要性が強調されている。しかし、馴致を成功させるためには、設備面から隔離豚舎が必要になることを忘れてはならない。一方、新たな病気を自分の農場に侵入させないためにも、隔離豚舎はぜひ準備しておきたい設備である。以下に隔離検疫豚舎が必要な理由および利用上の注意点について述べる。

① 隔離豚舎が必要な2つの理由

隔離検疫豚舎が必要な理由は2つある。1つは、自分の農場に病気を侵入させないため。もう1つは、導入豚の馴致の場としてである。

農場内に病気が侵入する経路は多々あるが、最も可能性が高いのは、何と言っても豚自体が持ち込むケースである。海外から病気が侵入する経路はもちろんのこと、国内でも清浄地域に遠隔地から病気が侵入する場合は、豚が持ち込むケースがほとんどである。これを防ぐには、導入先の衛生状態を把握しておくことと、自農場に一定期間、隔離飼育できる隔離豚舎が必要になる。導入した繁殖候補豚はいったん隔離豚舎で飼育し、健康状態を観察し、農場内に持ち込みたくない病気の有無を抗体検査などを通じて確認する。これが従来の隔離検疫豚舎の存在理由であった。この検疫豚舎の重要性は、豚コレラがワクチンによらない防疫対応となったことで、さらに高まっている。

しかし最近では、この理由のほかに、“馴致を実施する場所”という意味が加わってきた。馴致は、人工的にその農場に存在する微生物群に馴らす（＝感染させる）ことを目的として実施する。とくに近年、PRRSをコントロールするうえで母豚群の免疫を安定化する必要性が強調されている。細菌やウイルスに感染した豚は、一定期間、病原体を排泄し、やがて回

復して排泄を止める。この回復までの期間、隔離豚舎で飼育することが必要になる。なぜなら、微生物を排泄している期間に他の豚と接触させると、病気の蔓延を助長させる恐れがあるからである。

②隔離豚舎のレイアウト

隔離豚舎は、既存豚舎からできる限り離れていることが望ましい。App、パスツレラ、マイコプラズマ、レンサ球菌等は、数mは風で運ばれ、PRRSウイルスは2km、ADウイルスは9km以上運ばれると言われている。しかし、数kmも離れているところに導入用の豚舎を確保することは現実的ではないかもしれない。とは言っても、数十mは離しておきたいものである。

隔離豚舎には、鳥類が侵入できないようにネットを張り、専用の長靴、作業着を常備しておく必要がある。また、注射器などの器具も分けておくことが重要である。このような防疫上の基本事項が守られれば、豚舎自体の構造はとくに最新式のものでなくてもよく、利用しなくなった古い豚舎を利用したり(写真)、堆肥舎の隅を利用してもかまわない。

隔離豚舎の広さは、その農場の飼養規模によるが、隔離期間を2ヶ月とすると、2か月分の導入頭数を飼育できるスペースが必要になる。母豚100頭規模で年間の更新率40%とすると、年間40頭が導入頭数である。これは1ヶ月に3～4頭である。2ヶ月に1回の導入になれば、1回に7頭の候補豚が導入されるので、その分のスペースが必要になる。

③獣医師の指導の下、慎重に行う。

候補豚は、候補豚カードを用意し、①生年月日、②導入月



写真 古い豚舎を利用した導入豚隔離豚舎。英国での例

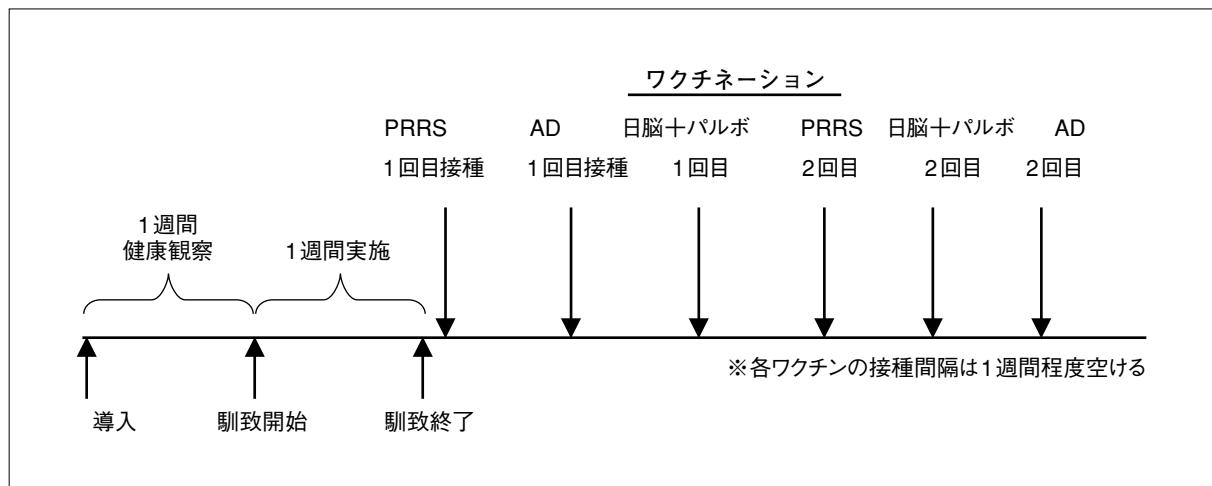
日、③馴致実施日、④ワクチン接種月日、⑤発情が来た日、などを記入しておく。導入は140～150日齢までに行い、馴致期間1週間、回復に最低60日、できれば90日おいてから交配するようにする。

馴致の材料は、分娩舎のふん(哺乳子豚の下痢便があれば最適、なければ母豚のふんでもかまわない)と水を1対1の割合で混ぜ、1頭当たり300mL程度を飼料のうえに振りかけて食べさせる。これを1週間続ける。虚弱豚はそのまま同居させるか、淘汰したあと豚房内に投げ入れてもかまわない。

その後、農場ごとに必要なワクチンを接種していくが、最初にPRRS、AD、パルボ、日本脳炎など、繁殖障害を起こす病気のワクチンを実施する。ARや大腸菌など、移行抗体により子豚の発症を防ぐためのワクチンはあと回しにする。また各ワクチンの接種間隔は1週間程度空ける。

PRRSおよびAD陽性農場における馴致の具体例を図に示した。ただし、これはあくまでも1つの例であり、各農場で

図 馴致とワクチネーションの実施プログラム例



実施する場合は、獣医師の指導の下、慎重に行う必要がある。また、馴致に伴う候補豚の発症程度が重篤な場合は、馴致を一時中止する必要がある。

馴 致期間中に実施する検査について

①導入時

まず、繁殖候補豚を導入した時点で、PRRS、AD、豚赤痢、TGE、豚コレラなどの疾病に感染していないか、抗体検査や病原学的検査から確認する。

②交配舎移動前

馴致、ワクチネーションが終了し、十分な抗体上昇を確認してから交配舎へ移動する。PRRSに関しては、抗体の上昇と同時に血清中にPRRSウイルスが存在していないことを、

PCRで確認する。

最初に述べたように、馴致は自農場の微生物叢に候補豚を馴らす行為である。十分に馴れたかどうかは、抗体の上昇をもって確認することになる。ただし、PRRSだけは抗体が上昇していても、血清中にPRRSウイルスが存在する場合があるので、血清中にPRRSウイルスが存在していないことを確認する必要がある。もし血清中にPRRSウイルスが存在している最中に交配・妊娠が成立すると、胎子が胎盤感染を起こし、虚弱豚が生まれたりウイルスを保有したまま子豚が生まれてしまう危険がある。これは他の病気も同様であるが、一般の病気は抗体が上昇すれば血清中から病原体が消えるのに対し、PRRSウイルスは抗体とウイルスが共存することが特徴である。ウイルスを保有して生まれた子豚はキャリアとなり、他の子豚の感染源となるので十分な注意が必要である。